

スピノザ『エチカ』におけるコナトゥスの定位 ——活動としてのコナトゥスと精神の現実的本質——

藤野 幸彦

序.

自己保存のコナトゥスは、徳の第一かつ唯一の基礎である (E4P22C¹).

スピノザの主著『エチカ』が、その名の示す通り一つの倫理学を打ち立てているとするなら、上に挙げた一節はその中核に自己保存のコナトゥスを据える、そうしたテーゼだと言ってよい。「至福は徳の報酬ではなく、徳そのものである」という『エチカ』第五部定理 42 を重ね合わせるなら——これは同書における最後の定理でもある——コナトゥスは徳の基礎であると言われる限り、また至福の基礎とも言われることになるだろう。『エチカ』における最後の主題であった精神の自由と至福に関しても、コナトゥスという概念がそこに深く関わっていることは疑いないように思われる。

ところで——このコナトゥス (conatus) とは何であろうか。もう少し言うなら、この伝統的な概念をスピノザはどのように捉え、定位していたのだろうか。「それにより各々の事物が自己の有に固執するよう努めるところのコナトゥス」(E3P7)、等々の表現を見れば明らかなように、この概念が事物の自己保存に関わっていることはまず疑いない。しかし、それが事物の自己保存に関わる「何」であるのか。本稿は、こうしたコナトゥスの定位を明らかにすることを目指している。

『エチカ』において、コナトゥスは次のような段階を踏んで論じられる。まずは、事物一般(これは極めて広範な意味での「事物」であり、いわゆる物的なもの、心的なものの両方を含めて、あらゆるものをカバーしている)の自己保存に関わるものとして。そしてその後に、特に、精神の自己保存に関わるものとして。人間

はこれらの両方に関わるから、『エチカ』で徳や至福が問題となる時、コナトゥスは上の両方を踏まえて扱われる。

しかし、コナトゥスとは「何」か。そしてまた、何故にコナトゥスが事物の自己保存を可能とするのか。これらの事柄は、『エチカ』の記述のみからでは必ずしも明瞭でない。上に挙げたような段階を踏みコナトゥスが扱われる時、その前提となるものが『エチカ』には欠けているとも思われる。

以下、本稿はスピノザの初期著作『形而上学的思想』を参照しながらその前提を探り、その上で事物一般のコナトゥス、精神のコナトゥス、と『エチカ』の進行に倣いながら、コナトゥス概念の内実を描き出すことを試みたい。それらの作業を通じ、本稿は神の活動 (actio)、そして事物の現実的本質 (essentia actualis) といった概念にまで及ぶスピノザの体系を再構成することになる。しかしまず、『エチカ』の記述を確かめることから始めることにしよう。

1.

早速、順に見て行きたい。『エチカ』においてコナトゥス、という術語が最初に登場するのは第三部・定理7であり、——もう少し広く捉えれば、その直前の、同部・定理4から始まる一纏まりの論証においてである。ここでは、その定理4から概観することにしよう。

【第三部・定理4】

いかなる事物も、外部の原因によってでなくては減ぼされることができない。

この定理は、それ自体において明白なものとして証明されている。事物の定義は当の事物の本質を肯定こそすれ、否定するものではないからだ、とスピノザは述べていた。これは、事物そのものの内には当の事物自身を減ぼすものが見いだされえない、ということに等しいとされており、結果、事物は外部の原因によってしか減ぼされえないと言われるのである。

この定理は、続く定理5において相反 (contrarius) という関係へと拡張される。こちらも確認しよう。

【第三部・定理 5】

諸事物は、その一方が他方を滅ぼしうる限りにおいて、相反する本性を有する。言い換えればその限りにおいて、そうした事物は同じ基体の内に在ることができない。

相反する、ということが、諸事物が同一の基体の内に在ることができない、ということに言い換えられている。また、ここで一方が他方を滅ぼす限りにおいて、と言われる理由は以下の通りである。ある事物が自身と同じ基体の内に在るものを滅ぼしうるということは、結局のところ当の基体自身を滅ぼしうることに通じる。しかし、これは先の定理 4 に矛盾するから、従って、相反する二つの事物が同じ基体の内に在ることは不可能である。

さらに進もう。定理 5 で語られた相反関係は、定理 6 において自己の有への固執、また自身を滅ぼすものへの対抗、として展開される。

【第三部・定理 6】

各々の事物は、自己の力の及ぶ限り自己の有に固執するように努める (in suo esse perseverare conatur)。

この定理の根拠を、スピノザは二つ挙げている。一つは、諸個物が神の属性がある一定の仕方では表現するところの様態である、ということ(ここでは『エチカ』第一部定理 25・系が参照されている)。これはさらに、神が存在し・活動する力能を表現する、ということに言い換えられている(同じく第一部・定理 34 が参照される)。もう一つは上の定理 4, 5 を受けて、諸事物が自身の現実存在を除去しようとするものに対抗する、ということである。

ここに一つ、本稿が扱うべき問題が現れている。先の定理 4 で語られていたのは、事物は外部の原因によってしか滅ぼされえない、ということだった。それがここでは、自身の現実存在を除去しようのものに対抗する (opponi) と言われている。これら二つの事柄は、単純に同一視できるような主張ではないように思われる。そうだとすれば、求められるべきはこの同一視を可能にしているスピノザのロジックである。

そのロジックは、事物が神の属性を、そしてまた神が存在し・活動する力能を

表現する、と言われることも深く関わる。しかし先へ進む前に、『エチカ』をもう少し見ておくことにしよう。コナトゥスの語が現れるのは、第三部・定理7においてである。

【第三部・定理7】

それにより各々の事物が自己の有に固執するよう努めるところのコナトゥスは、当の事物の現実的本質に他ならない。

この定理の証明では「事物が自身の有に固執するよう努める力能ないしコナトゥス」というふうに、事物の力能とコナトゥスが等置される。またこの力能ないしコナトゥスは「事物がそれによって単独で、または他の諸事物とともにある事柄を行い (agere)、またあるいは行おうと努める」力能ないしコナトゥスを言い換えたものとして語られていた。そしてこうした力能ないしコナトゥスこそが、事物の現実的本質だとスピノザは言うのである。

問題を整理しよう。本稿が問うべき事柄は、コナトゥスという概念が事物の自己保存を可能にしている、その理論の内実である。『エチカ』では事物が「外部の原因によってのみ滅ぼされうる」ということから、当の事物自身が「自身の現実存在を排除するものに対抗する」、ことへと議論が進展していた。これら二つの主張はどのように関連しているのか。このことを本稿は扱っていきたい。スピノザにおけるコナトゥスとは「何」か、という冒頭の問いに答える糸口もまた、恐らくはここにある。

2.

本稿は、最初に『エチカ』におけるコナトゥス論はその議論上の前提を欠いているのではないかと疑問を提示した。その前提とは即ち、外的な原因によってのみ滅ぼされうる、ということから、そうした原因への対抗である自己の有に固執するコナトゥスへと接続されていく議論の背景である。

これを求めるために、ここで本稿は一旦『エチカ』から離れることにしたい。代わって注目されるのは、スピノザの初期著作『デカルトの哲学原理』と、その付論『形而上学的思想』である。これから確認していくように、スピノザが語るコナ

トゥスは、少なくともその端緒としてはデカルトの力学との関係で現れたものと考えられる。これらを見て行くことで、この概念に込められたスピノザの独自性もまた明らかになることだろう。

以下は、『デカルトの哲学原理』からの引用である。

各々の事物は、それが単純かつ不可分であるとともにそれ自身のみにおいて考察される限り、自己の力の及ぶだけ常に同じ状態に固執する (in eodem statu perseverat)。 (PPD2P14)

一度動かされた物体は、外的な原因によって妨げられない (retardetur) 限り、常に動かされ続ける (moveri pergit)。 (PPD2P14C)

これらの定理が、デカルトにおける自然の第一法則に言及したものであることは間違いない。実際、スピノザは『哲学原理』第二部・定理 37, 38 への参照を促してもいた。我々が一般に慣性の法則と呼ぶものがこの箇所であられること、そして一見して窺えるように、これらの言説が『エチカ』第三部・定理 4 や定理 6 と相通じる要素を含んでいることは注目に値する。『デカルトの哲学原理』におけるコナトゥスの定義を見ておこう。

運動へのコナトゥス (conatus ad motum) という語を、我々は何らかの思惟のことではなく、単に物質の部分が運動へと促されており、またもし何らの原因によっても阻止されることがなければ、実際にある方向へと動くであろう、という状態にあることと理解する。 (PPD3Def3)

本稿はこれらの議論を——勿論、ここで言われるコナトゥスが力学の議論に限定されているという事情は認めるにしても——『エチカ』におけるコナトゥス概念の基礎を成すと考える。しかしここで、やはり次のような疑問がありうる。自己の力の及ぶだけ常に同じ状態に固執する、という上の引用に見た事態は、何故に可能となるのか、と。この問いは、先に『エチカ』に対し提示した疑問と平行になっている。慣性の法則のように、何らかの変化が加えられるまでは同じ状態に留まる、ということと、そうした変化に対抗する、ということはやはり別の事柄であろう。

この点について、D. ガーバーはライブニッツがデ・フォルダー宛書簡で展開したデカルト批判がスピノザの議論にも当てはまる、という旨を述べている²。その一節を確認しておこう。

…物質の中に、自己の状態を維持する力があるとしてみるなら、確かにその力を延長だけから導出することは何としてもできません。いかなるものも、変化の理由が生ずるまでは自己の状態を保ち続けるということ、これが形而上学的必然性をもった原理であることは私も認めます。しかし、次の二つのことは別です。一つは、変化を与えるものが生ずるまではそれまでの状態を続けるということ、これは、どの状態に対しても無差別にさせることでもあります。もう一つは、この方がずっと重要なのですが、無差別なのではなく、或る状態を維持させるような力といわば傾向性とを有して、そしてそれゆえ動かされることに抵抗している、というものです。

(デ・フォルダー宛 1669. 3. 24 書簡：『ライブニッツ著作集』9 巻 pp. 64 - 65)

変化の理由が生ずるまでは事物が自己の状態を保つとしても、これのみでは当の事物があらゆる状態に対し無差別であり、それ故に自己の状態を保っているのか、それとも変化に抵抗するが故に自己の状態を保っているのかは区別できない。自己の状態を保つ事物は、ただあらゆる状態に対し無差別なだけで何らの力も有していないかも知れないのである。従って事物が自己の状態を保ち続けたとしても、変化に抵抗し、自身の状態を保つ力を有すると結論することはできない。このようにライブニッツの主張は纏められよう。

これは、実際にデカルトが『哲学原理』第二部・43 節で行った推論を念頭に置いた議論と考えられる。この箇所デカルトは、「おのおのの物体が他に働きかけ、あるいは他の働きに抵抗するための力」が、「あらゆる事物がそれ自らに關しては、そのいまあるのと同じ状態に留まろうとする傾向を持つ」ことにあると確かに述べていた。今、ガーバーは『エチカ』第三部、定理4から定理6に至る論証に、同じ過ちが見いだされはしないかと指摘しているのである。実際、『デカルトの哲学原理』の記述はデカルトの見解に近く、スピノザにもデカルトと同様の困難があるように思われる。

ライブニッツの主張は、上の引用部冒頭にもあるように「自己の状態を維持

する力」は延長のみからは導出されえない、というものだった。とはいえ、デカルト自身はこの力を神の協力によって説明するだろう³。問題となるのは「自己の状態を維持する力」を事物が有するか否かではなく、そうした力が如何に根拠づけられるかにあると見てよい。では、スピノザはこの力をどのように説明するだろうか。

慣性の法則が成立しているという事実のみからでは、自己の状態に固執する力を導出することはできない。一言にすれば問題はこうなっており、またこの指摘は恐らく正しい。しかしスピノザの図式がこれとは逆に、固執する力を前提とするのだとすればどうだろうか。その場合、論証には何らかの不適切さが認められるとしても、『エチカ』に提示された体系そのものからは困難を排除することができるだろう。次節ではこの図式を取り出すべく、議論を進めて行くことにしたい。

3.

更に著作を移って、『形而上学的思想』を見ることにしよう。『デカルトの哲学原理』がデカルト哲学の注釈という色合いを強く帯びているのに対し、この付論はスピノザ自身の思想を比較的好く表わしたものと位置づけてよい⁴。

さて、その『形而上学的思想』の中で、スピノザは次のように述べていた。即ち、事物とそのコナトゥスは事物としては区別されない、というのである。

…彼らはコナトゥスという言葉によって何を理解するべきかも知らず、事物そのものと、各々の事物の内にある、自身を保存することへのコナトゥスを区別しているのである。即ち、これら二つは理性において、あるいはむしろ言葉においては区別されるが——概してこのことが彼らを欺くのである——しかし事物そのものにおいてはいかなる仕方でも互いに区別されないのである。

…このことを明瞭に理解するために、最も単純な事物を例にとろう。運動は、自己の状態に固執する力 (vis) を持つ。しかしこの力は運動そのものに他ならない。言いかえれば、運動の本性とはそのようなものなのである。実際、

もし私が、この物体 A の内には一定量の運動以外の何ももないと言うとするなら、このことから明瞭に以下のことが——その物体 A に注意を払う間は、私は常にその物体が運動すると言わねばならないことが——帰結するからである。また実際、その物体が運動する力を自身から放棄するとでも私が言うとするなら、私がこの仮説において前提したものの他に、それによってその物体が自身の本性を放棄したところのある他のものを、必然的に、当の物体自身に帰せしめることになるからである。

(CM1, Chap. 6)

運動する物体は、その物体のみに注意する限り、常に運動すると言われねばならない。このことは、まさに運動の本性に基づくものであり、事物とそのコナトゥスとが区別されないからだ。スピノザの主張はこのようになっていた⁵。

自己の状態に固執する力(これはコナトゥスのことを指すと見てよい)が運動の本性に属する、という主張については、改めて『デカルトの哲学原理』を見ることでその内実を補完できる。

この定義〈筆者註：場所的運動の定義を指す〉において混乱を避けるために、彼〈筆者註：デカルト〉は絶えず運動体の内に在るところのもの、即ち移動 (translatio) についてのみ語る。これはそれを、至るところで人々がそうしたように、移動を引き起こす (transferre) ところの力 (vis) あるいは作用 (actio) と混同しないためである。彼らは一般に、この力あるいは作用はただ運動のためにのみ必要であって、静止のためには必要でないと考えているが、この点において彼らは全く誤っている。というのは、ある静止している物体に一定の大きさの運動が与えられるために求められる同じ力が、他方ではこの物体から逆に同じ大きさの運動が取り去られ、全く静止するために必要であることは、それ自身で知られるからである。

(PPD2Def 8, n. 2)

デカルトと同様に、スピノザは場所的運動 (motus localis : 物質の一部分、即ち一つの物体が、それと直接に接触しており、かつ静止していると考えられる物体の傍から、他の物体の傍へと移動すること (PPD2Def8)), あるいは移動からは

区別されるものとして、そうした移動を引き起こす力ないし作用について語っていた⁶。後に運動の量 (quantitas motus)、静止の量 (quantitas quietis) とも言い換えられるこれを (PPD2P22Dem)、本稿は上に参照した『形而上学的思想』で語られた運動に相当するものと解釈する⁷。自己の状態に固執する力が運動の本性に属する、という主張の意味は、運動とはコナトゥスそのものである、ということに他ならないのである。

以下、このようにコナトゥスと同一視される運動を、《運動》として場所的運動から区別することにしよう。ここでもう一つ、見逃してはならない論点がある。この箇所においてスピノザは、事物とそのコナトゥスが区別されないことの例として《運動》を持ち出していた。《運動》の本性によってコナトゥスを説明しよう、という構図になっていることは、引用文中からも窺える。それならば、《運動》の本性であるコナトゥスが事物と区別されないと述べられる時、彼は事物—《運動》—コナトゥス、という三項を同一視するテーゼをもまた主張していたのではないだろうか⁸。

この解釈は、スピノザにおけるコナトゥスとは何か、という問いに一つの示唆を与えるものである。それは事物が自身の状態に固執する力であるとともに、もはや事物そのものと区別されない。あるいはむしろ、次のように述べるべきかも知れない。スピノザは恐らく、諸々の事物と呼ばれる存在者を、根源的には力、ないし作用として捉えられるべきものと理解していた。コナトゥスが事物の現実的本質である、という先に見た文言も、そうした主張として今は読まれるべきだろう。そしてその限りで、事物が自己の状態に固執する力を持つことは何ら不思議ではない。むしろ事物とはそうした力そのものだ、とスピノザは主張していたのである。

これにより、本稿はライプニッツの問いに対して半分は答えたことになる。『エチカ』の論証は「事物が自己の状態を保つ」ということから「事物が自己の状態に固執する力」、即ちコナトゥスを持つという結論を導く、という形を取る点において、確かに不適切ではあるかも知れない。しかしスピノザの体系そのものを参照する限り、事物がコナトゥスを有するということは、事物がコナトゥスそのものである、という仕方で担保されている、と本稿は主張したい。

残る問題の半分は、このコナトゥスが何に由来し、如何に根拠づけられている

かである。本稿は以降、事物—《運動》—コナトゥスという図式を更に検討し、これが『エチカ』においても貫徹されたテーゼであることを確認したい。そしてその上で、力、ないし作用とも目されたこれらが、スピノザの体系の内でのどのように位置づけられるかを検討しよう。その結果として本稿は、コナトゥスという力が神の力能にその基礎を持つものとして理解されるべきことを示すはずである。

4.

さて、前節の最後に指摘した事物—《運動》—コナトゥスの同一視。これを『エチカ』に見いだして行くには、事物 (res) に関する議論を追うことが適当である。

事物という語には、特にスピノザによる定義は与えられていない。しかし、その用法を見れば、極めて広い意味で事物一般——我々が日常的に「もの」と呼ぶような、そうした存在者を表わす術語であることは明らかと言ってよい。

加えてもう一点明らかなことは、我々はスピノザが語る事物を、一般にそう考えられていたような「実体」と理解してはならない、ということである。「諸々の特殊的事物は神の属性の変状、あるいはそれによって神の属性がある一定の仕方では表現されるところの様態に他ならない」(E1P25C) のであり、また「物質はいたるところで同一であり、その部分は物質が様々な仕方では変状すると我々が考える限りにおいてのみ区別される。従ってその諸部分は様態的にのみ区別され、実在的には区別されない⁹」(E1P15S) とも彼は明らかに述べている。スピノザは様態としての事物に、いかなる実体性も認めてはいなかった。

事情は以上の通りである。しかしながら、なお諸事物がまさに個別の事物、即ち物体や精神として扱われていることもまた疑いえない。ならば、そうした事物の個別性、また個性といった事柄を可能にする様態的区別とは、如何に位置づけられるか。この問いを通じ、ここで本稿は『エチカ』における「事物」の定位を試みたい。

まずは議論を延長属性に限定し、スピノザの言説を見て行くことにしよう。以下の引用は『エチカ』第二部・定理 13 に続いて展開された、物体の本性に関する補助定理群の一節である。

【個体の定義】(Def, afterE2P13)

同じ、あるいは異なった大きさの幾つかの物体が、他の諸物体から圧力を受け相互に接合するようにされている時、あるいはもし同じ、あるいは異なった速度で動かされているならば、自己の運動をある一定の割合で相互に伝達するようにされている時、我々はそれらの物体がたがいに合一していると言い、また全てが一緒になって一つの物体、あるいは一つの個体を組織していると言う。またこの物体あるいは個体は、構成諸物体のこうした合一によって他の諸物体と区別される。

スピノザの論旨は明快である。即ち個体とは、自身を構成する下位の諸物体がその運動を一定の割合で伝達しあう、そのことによって個体性を規定される存在者なのだ、このように理解することができる。では、そうした下位の諸物体は——こちらもやはり個体である、と我々は言わねばならない——如何にして個体と言われるのか。さらにスピノザの言説を参照しておく。

これまでに我々は単に運動および静止、迅速および遅緩によって相互に区別される諸物体からのみ組織されている個体、言いかえれば最も単純な諸物体からのみ組織されている個体を考えた。しかし今もし本性を異にする多くの個体から組織されている他の個体を考えるならば、そうした個体は他のいっそう多くの仕方でも動かされ、かつそれにもかかわらずその本性を保ちうることを我々は見出すであろう...さらに我々はこうした第二の種類の個体から組織された第三の種類の個体を考えるなら、また我々はそうした個体はその形相を少しも変えることなしに、他の多くの仕方でも動かされうることを見出すであろう。(E2P13S, L7S)

ここでも、スピノザの主張は明確だと言っていいただろう。即ち、諸個体を構成する下位の物体の中で、最も下の階層に属する諸物体——これを最も単純な物体¹⁰、とスピノザは呼んでいる——これらは運動と静止、迅速と遅緩によって区別される¹¹。これは、『デカルトの哲学原理』で語られた《運動》に相当するものと考えてよいだろう。このことは、「物体は運動および静止、迅速および遅緩 (celeritas et tarditas) に関して相互に区別され、実体に関しては区別されない」

(E2L1) というスピノザの言説から、その傍証を得られる。というのも、彼は『デカルトの哲学原理』において、次のように述べていたからである。

ここで我々は、運動している物体における力ということを、運動の量のことと解する。この量は、等しい大きさの物体にあつては運動の速さ (celeritas) に比例して大でなければならぬ。…これに反し、静止している物体における抵抗の力ということを、我々は、静止の量のことと解する。

(PPD2P22Dem)

物体は運動することが遅ければ遅いほど (tardius) それだけ多くの静止の性質を帯びる。

(PPD2P22C1)

運動および静止、迅速および遅緩という『エチカ』に見られる並置と、この『デカルトの哲学原理』における言及は関連したものと理解できる。より迅速である、ということはより多くの運動(あるいは運動の量)を有するということであり、他方より遅緩である、ということはより多くの静止(あるいは静止の量)を有するというに他ならず、またその差異によって各々の物体は区別される、とスピノザは述べている。

そしてまた、運動の量ないし静止の量は、この箇所において運動や静止を引き起こす力として理解されていることが分かる。つまり、運動の量、静止の量とは先に見た《運動》のことであり、また《静止》についてスピノザは語っていることになる。

注目されるべきは、最も単純な物体と、その《運動と静止》——両者の関係をスピノザが如何に捉えているかである。最も単純な物体が現に存在していて、それらがどのような(一般的な意味、場所的運動としての)運動、あるいは静止を有するかにより区別される、と言われているのではない。これでは、諸事物は様態的にのみ区別され、実在的には区別されないというスピノザ自身のテーゼが成り立たなくなってしまう。むしろ逆に、《運動と静止》が(論理上、あるいは概念上)先だつてあり、この《運動と静止》の差異により諸物体の存在が規定される。そしてこの時、下位の構成物体がその運動を伝え合うという事態もまた、根源的

には《運動と静止》に現れる状態の一つとして理解されることになるだろう¹²。これが、本稿が理解するところの様態的区別の内実である。

5.

《運動と静止》と事物の関係について、もう少し見ておこう。スピノザはシュレーカーから「神から無媒介的に産出されるもの¹³」の例を求められた際、「延長においては運動と静止」であると答えていた(書簡 63, 64 を参照)。この運動と静止もまた、場所的運動ではなく力、作用としての《運動と静止》であると本稿は理解する。この論点は、チルンハウスに宛てられた書簡からその内実を敷衍できる。その一節を引いておこう。

延長の概念のみから事物の多様性がアプリアリに証明されうるかとのお尋ねですが、それが不可能であること、また従って、デカルトにより物質が誤って延長と定義されていること、むしろ必然的に物質は永遠無限の本質を表現する属性によって説明されねばならぬこと——こうしたことを既に十分明瞭に示したと私は信じます。(書簡 83)

この書簡で批判されている延長の概念とは「デカルトが解した延長、即ち静止した質量としての延長」(書簡 81 を参照)を指しており、これに代わるものとしてスピノザが自身の延長概念を提示したことが分かる。加えて、そのような延長から無媒介的に産出されるものが《運動と静止》であるとすれば、これが事物の多様性を説明する装置であることもまた明らかだろう。諸物体の存在は、延長属性から無媒介に産出される《運動と静止》において理解される。それは、諸個体を構成する最小単位である最も単純な物体は、《運動と静止》において現れる差異によって、様態的に区別されるということであった。そして、それら最も単純な諸物体により組織されるものとして、諸々の物体は位置づけられるのである。

この時、《運動と静止》こそが事物の個性性を説明する原理であるという本稿の主張は、確かにスピノザのものだと言ってよい。実際に、事物の本質についてスピノザは次のように語っていた。

それが与えられればある事物が必然的に定立され、またそれが除去されればそのある事物が必然的に除去されるようなもの、あるいは、それが無ければある事物が、また逆にそのある事物が無ければそれが在ることも考えられることもできないようなもの、そうしたものが事物の本質に属すると私は言う。(E2Def2)

人間身体の形相を構成するものは、身体の諸部分がその運動をある一定の割合で相互に伝達しあうことに存する(第二部定理 13 の後におかれた補助定理 4 の前にある定義により)。(E4P39Dem)

構成諸物体の間に成立する、運動のある一定の割合がある。これ抜きにして当の事物は在ることも考えられることもできないし、また当の事物が存在するならば、そこには必ず一定の割合が成立している。故に、一定の割合が成立している、というこのことこそが、当の事物の本質を構成しているのである。これは、当の事物の存在と、その本質としての運動の割合の成立が事柄として等しいこと、即ち、両者が同一の事態を指していることを意味している。またここで語られる構成諸物体の運動とは、既に述べた通り根源的には《運動と静止》によって理解されるべきものであった。

故に、本稿は以下のように結論しうる。延長属性における事物とは、一定の割合が成立するところの諸物体の運動を基礎づける、《運動と静止》の一部であると。言うなれば、延長属性において様態としての事物は、この《運動と静止》にまで存在論的に還元されることになる。

このテーゼは、コナトゥス論の理解においても重要な役割を担っている。というのも、既に見たように、スピノザは事物のコナトゥスを当の事物の与えられた本質、また現実的本質とも呼んでいたからである。

任意の事物がそれにより単独で、または他の諸事物とともにある事柄を行い、またあるいは行おうと努める力能ないしコナトゥス——言いかえれば、(この部の定理 6 より)それにより任意の事物が自身の有に固執するよう努める力能ないしコナトゥスは、当の事物の与えられた本質、即ち現実的本質に他ならない。(E3P7Dem)

ここまでの議論に沿って整理するなら、我々はこの議論を以下のように理解し直すことができよう。《運動と静止》の一部における状態として諸事物はその本質を規定され、またその成立によって事物の存在は現実化する¹⁴。そしてこの《運動と静止》こそ、当の事物が何らかの事柄を行おうとするところのコナトゥスに他ならない。ここに我々は、先に見た事物—《運動》—コナトゥスというテーゼを『エチカ』において、事物—《運動と静止》—コナトゥスを同一視するテーゼとして取り出すことができるだろう。

6.

さて、本稿はここまで『エチカ』のコナトゥス論が有する基礎を探って来た。その結果得られたものは、状態への固執が運動の本性に属すること、加えて事物—《運動と静止》—コナトゥスが同一視されるというスピノザのテーゼである。これは書簡にも見たように、彼によるデカルト批判の側面を併せ持つものであった。

本稿の解釈は、スピノザのコナトゥス概念に一つの形而上学的な前提を措定することになる。しかし、この措定は彼に対して不当な、外部からのものではない。この前提が神の活動として位置づけられることをここで見ておきたい。

「神の存在とその本質とは同一である」(E1P20) とスピノザは述べていた。そしてまた、「神の力能は神の本質そのものである」(E1P34) とも言われる。だとすれば、神における存在＝本質＝力能という等置図式がここに成立することになる。

これは、単純に言葉を繋ぎ合っただけのものではない。「自己原因であると言われるその意味において、神はまたすべてのものの原因であると言われねばならない」(E1P25S)、また「神自身ならびにすべてのものがそれによって存在しかつ働きをなす神の力能は神の本質そのものである」(E1P34Dem) とも言われる時、ここでは確かに自己原因という存在と本質の等置に、産出の力能が重ね合わされてもいる。

この産出とは——延長属性に関して述べる限り——まさに神の本性から必然的に生じる《運動と静止》という活動において、諸事物の存在が現実化される、

ということに他ならない¹⁵。これも一度確認したが、個物は「神が存在し・活動する神の力能をある一定の仕方では表現するもの」である、とも言われていた (E3P6Dem)。存在と活動が結び付けられるこの図式を、我々は今や個物の概念、またコナトゥスの概念にまで読み込んで行くべきであろう。スピノザの体系において存在と活動とは、分かち難く結び付けられた一対の術語なのである。

その限りで全ての事物は、それ自身の活動ともはや区別されない。その活動とは無論、延長属性においては《運動と静止》として表現される神の力能に基礎づけられ、またこれこそが事物のコナトゥスである。そうだとすると、事物—《運動と静止》—コナトゥスというこの同一視は、神における存在＝本質＝力能の等値図式をその基礎に持つと言わねばならないだろう。神は自身が現実存在することと同じ意味において、無限の《運動と静止》を自身の内に産出する。そしてこの《運動と静止》においてこそ、全ての事物はその存在を現実化されるのである。

では、こうしたスピノザの図式は、思惟属性においては如何なる仕方では現れていたのか、冒頭にも確認した通り、徳の基礎、至福の基礎としての精神のコナトゥスを理解してこそ、我々は『エチカ』を一つの貫徹した体系として扱おう。「観念の秩序および連結は事物の秩序および連結と同一である」(E2P7) と述べ、「延長の様態とその様態の観念とは同一の、しかし二つの仕方では表現されたものである」(E2P7S) とも言われる『エチカ』の体系からすれば、思惟属性においても延長属性と同一の事態が、異なる仕方では起こっていることは疑いないだろう。しかし、その具体的な議論はどうなっているのか。最後に、このことを見て行くことにしよう。それは、観念という思惟属性における事物をもまた、神の活動の内では捉える試みへと繋がっていくはずである。

7.

改めて、観念とは何か、と問うてみよう。それは画板の絵のように無言のものではなく、思惟の様態、即ち「知解することそのもの (ipsum intelligere)」に他ならないとスピノザは言っていた (E2P43S を参照)。さらに彼の議論を確認していこう。

意志と知性は、それぞれ個々の意志作用と観念そのものに他ならない(この部の定理 48, およびその備考より)。しかるに、個々の意志作用と観念とは同じ一つのものである(前定理より)。故に、意志と知性とは同一である。

(E2P49C, Dem)

これらの言及に曰く、観念とは「知解することそのもの (ipsam intelligere)」であり、また「個々の意志作用 (singularis volitio)」と同じ一つのものである。こうした事柄を、我々はここまでの議論からもよく理解できるはずである。即ち、ここで言われる知解することそのもの、また意志作用というものこそ、延長属性における《運動と静止》に相当し、神の活動を表現するものではないだろうか。このことは、次の議論からさらに確かめられるように思う。

精神の内には、観念が観念である限りにおいて含む以外のいかなる意志作用も、即ちいかなる肯定作用も否定作用も存しない。(E2P49)

...ある意志作用、即ちそれによって精神が三角形の三つの角の和が二直角に等しいことを肯定するような思惟様態を考えよう。...この肯定作用は三角形の観念の本質に属しており、またそれ自身以外の何ものでもない。...即ち、全ての意志作用は観念以外のなにものでもない。(E2P49Dem)

この定理と証明は、肯定作用こそが——意志作用はこの肯定作用として理解されている——観念の本質そのものに他ならない、と明らかに述べている。だとすれば、我々は事物—《運動と静止》—コナトゥスという延長属性におけるテーゼに対応させて、観念—肯定作用—コナトゥスというテーゼを思惟属性において提示できよう。そして人間精神が一つの観念であり、またその観念対象が当の人間の身体である、と語られる時 (E2P11, E2P13 を参照)、「我々の精神のコナトゥスにおいて第一にして最も重要なものは、我々の精神の現実存在を肯定することである」(E3P10Dem)という定式化が可能となる。即ち精神とは、身体の現実存在を肯定する一つの肯定作用に他ならないのである。

この時、精神は同時に、こうした肯定作用によってその本質を規定されている。各々の事物は、自己の力の及ぶ限り自己の有に固執するように努める。これと同様、あるいはむしろその一つの例として、我々の精神は自己の力の及ぶ限りで、

自身の身体の現実存在を肯定する、そうした作用であり続けるように努めるのである。

自己保存のコナトゥスは、徳の第一にして唯一の基礎である。冒頭に見たテーゼを思い出そう。「徳と力能を同一のものと私は理解する」(E4Def8)とも彼は述べていた。人間に関連づけられる徳とは、人間が、自身の本性の法則のみによって理解されるような、あることをなす力能を有する限りにおいて、人間の本質ないし本性そのものなのだ。このことはまさに人間の徳が、精神が身体の現実存在を肯定する、この肯定の作用にこそ基礎付けられることを示しているのである。

結.

以上が、本稿の全てである。論を閉じるに当たり、冒頭の問いに答えることにしよう。コナトゥスとは、事物の自己保存を可能にする「何」であったのか。本稿の答は、以下の通りである、即ち、コナトゥスとは、当の事物とはもはや存在論的には区別されえないところの、事物の現実的本質としての活動である、と。

この活動には、自身の状態への固執が既にして含まれている。運動の本性とそうしたものだ、というスピノザの言葉を思い出そう。さらにこの形而上学的前提は、神における存在＝本質＝力能の等置と、そこから理解される神の活動としての産出に基礎づけられることを本稿は見た。こうした存在論的な基盤の上でなければ、スピノザのコナトゥス概念は理解されえないだろう。事物—《運動と静止》—コナトゥス、あるいは観念—肯定作用—コナトゥスという同一視は、確かに、彼の体系全体に関わる論点だったに違いない。

本稿の各論は、振り返ってみると、スピノザにおける「事物」概念の特異性——即ち、事物を神という唯一実体の様態だと位置づける存在論の特異性——を、改めて浮き彫りにするものであった。それならば、そうした形而上学体系において、我々人間の徳とは何だろうか。あるいは、精神の至福とは何だろうか。残念ながら、本稿はこれらの議論に立ち入ることが出来なかった。しかし『エチカ』を一つの倫理学として理解するために、その核となるコナトゥスという概念の内実については十分に示しえたように思う。本稿が示した解釈が、『エチカ』

読解の一つの参照軸として機能しうるとすれば幸いである。

以上

註

1. 本稿はテキストの参照箇所を以下のように示す。『エチカ』…E、『デカルトの哲学原理』…PPD,『形而上学的思想』…CM, 定理…P, 備考…S, 系…C, 補助定理…L, 証明…Dem, 公理…A, 定義…Def. また、アラビア数字は『エチカ』その他の部や定理の番号等を表わす。例えば本文にある「E3P5」は、『エチカ』第三部・定理5を示すものと了解されたい。
なお、本稿はスピノザのテキストからの引用に際し畠中尚志氏の邦訳を主に参照し、また必要に応じてこれに手を加えている。
2. Garber(1994)を参照のこと。本文中に述べた通り、この論証上の不適切さよりも、コナトゥスが何に基礎づけられているかという点が本来的な問題であると本稿は見ている。
3. 『哲学原理』第一部・21節。またスピノザはこれと内容的に対応する『デカルトの哲学原理』第一部・定理12を根拠に、「各々の事物は、それが単一である限り、即ちそれ自身のみで考察される限り、自己の力の及ぶだけ、常に同じ状態に固執する」(PPD2P14)と述べている。
4. こうした各著作の位置付けについては、『デカルトの哲学原理』に付された畠中尚志氏による解説を参考にした。また、近年では『形而上学的思想』の中でスピノザが取り上げた内容を当時のデカルト主義者達の議論と——例えば、ヘーレポルトやクラウベルクらの議論と——比較し、それらに対する批判として『形而上学的思想』を理解する研究が提示されている。デカルトのみでなく近世スコラ、さらにデカルト主義者といったそれぞれの思想がどの程度この著作に影響を与えたかはなお予断の許されぬところではあるが、しかし、こうした研究にスピノザの独自性を初期の著作から認めようとする傾向があることは認められてよいと思われる。Park(2011), Savini(2011)を参照。
5. ただし、『形而上学的思想』第二部・6章では生命(vita)を「事物が自己の有に固執する力(vis)」と定め、これを事物そのものとは異なる(diversus)ものとスピノザは述べている。しかし本稿は、本文中でも引用したように、両者の区別をあくまで理性的な、言葉の上でのものと理解する立場を取る。従って、これらの箇所は矛盾なく読まれうると見てよい。
なお、こうした本稿の解釈は、『形而上学的思想』におけるコナトゥスには慣性の法則以上の内実は未だ与えられていない、とする場(藤井)氏の立場とは異なるものとなる。とはいえ、氏の解釈に従うとしても『エチカ』に結実するようなスピノザの理論は、『形而上学的思想』の段階でネガには構想されていた、ということをお我々は認めることができる。故に、『エチカ』におけるコナトゥス概念を如何に解するか、という本稿の主題との関係で言えば、こうした相違は大きな意味を持たないと考えられる。的場(藤井)(2009)を参照。
6. これらは、『哲学原理』第二部・24, 25節, 43, 44節に対応するものと考えられる。
7. 『デカルトの哲学原理』で語られた力、作用としての運動と静止が、後に延長から無媒介的に生じるとされた運動と静止に相当する、という解釈をギャレットが提示している。

Garrett (1994) を参照。本稿はこれが『形而上学的思想』で語られた運動にも相当するものと捉え、また以下の本文で述べるようにコナトゥス、さらには神の活動とも同一視することでその解釈を拡張する試みである。

8. 『神、人間及び人間の幸福に関する短論文』第二付録でも「各個の物的事物は運動と静止の一定割合以外の何物でもない」と述べられており、また同書第二部・序言の註では、「現実中存在するありとあらゆる個物は運動と静止に依ってそうしたものになる」とある。ここでは場所的運動と力としての運動の区別は語られていないが、しかし恐らく『形而上学的思想』と同じ図式をスピノザは提示しており、従ってこの主張は一貫してスピノザ自身のものであった、と考えてよいものと思われる。
9. この備考においてスピノザは、物的実体 (substantia corporea) という語を延長実体と同じ意味で用いている。この術語が用いられた理由を探るとすれば、それはデカルトに由来するものとなろう。よく知られたスピノザとデカルトの相違として、延長実体の諸部分に関する実在的な区別を認めるか否か、という論点を我々は挙げることができる。これを論じるに際しデカルトは物的実体の語を用いており、この箇所と自説との関連を明らかにするために敢えてスピノザはデカルト的な語を採用したのではないかと推察されるのである。
10. 但し、厳密には最も単純な物体、と呼ばれるこれを個体と呼ぶことはできない。というのも定義にもある通り、個体は自身を構成する下位の諸物体の存在を前提とするからである。自身を構成する物体を持たない最単純物体は、この限りで個体ではありえないことになろう。このことは本論の進行上とりたてて重要な事柄ではないが、ここに断っておく。
11. ギャレットはここで言われる「割合 (ratio)」を数学的な比ではなく、英語で「pattern」、「relation」などという語で表わされるものを指す語とする解釈を提示している。この点に本稿も同意し、特に物体を《運動と静止》の状態として理解するに際しては、これを一種のパターンとして位置づける立場を取る。
12. 具体的な事物の存在を如何に説明するか、という点については J. ベネットが提示した“Field Metaphysic” というモデルを参照することが有用であると本稿は考える。詳細を検討することはできないが、以下、彼の解釈の大枠を提示しておきたい。

まずベネットは、スピノザが言う延長実体を「空間の全体 (whole of space)」と捉え直す。そして様態を、そうした空間が有する性質 (property-quality)、状態 (state)、あるいは空間における形容詞的なもの (adjectival) と位置付ける。加えて、延長において神から無媒介的に産出される《運動と静止》を、彼は「一つ水準を上げた際、空間における事物の運動として概念化され得るような、空間内における変化 (alteration)」として理解するのである。

こうした図式の下、空間-時間的に連続する場所-時間の集合 (spatio-temporally continous set of place-times) として定義される「ストリング (string)」という概念を彼は導入する。このモデルを用いた際、事物の場所的運動は次のように説明されるだろう。即ち、空間-時間的に連続する $R_1-T_1, R_2-T_2 \dots R_i-T_i$ というストリングにおいて、いずれの領域 R も同じ性質を有するならば、このストリングは我々が空間内の物理的対象、と呼ぶものの運動の軌跡を定義できる。従って我々は何ら物理的対象を指定することなしに、事物の運動を(あくまで見かけのものとしてではあっても)説明することができる、というわけである。

このモデルは延長属性に限られているが、しかしスピノザ存在論の枠組みを上手く捉えたものと思われ、本稿は基本的にはベネットの解釈に同意している。Bennett (1984)

参照。

13. ここで言及されているのは『エチカ』第一部・定理 21 において語られたもの、即ち、「神のある属性の絶対的本性から帰結する全てのものは、常にかつ無限に存在していなければならない。言いかえれば、それは当の属性によって永遠かつ無限である」と言われるところのものだと考えられる。その産出が「無媒介的 (immediate)」であることは後の第一部定理 23・証明において語られている。
14. スピノザは『エチカ』第二部定理 8・系において、個物の現実存在を「神の属性の内に包容されている限りにおいてのみ現実存在する」場合と、「さらにまた時間的に持続すると言われる限りにおいても現実存在する」場合の二つの相において捉える旨を述べている。また、続く定理 9 ではこの点を踏まえ、現実態において現実存在する (actu existens) 事物という表現が見られる。本稿が述べる現実化、とはこの現実態における現実存在、時間的に持続すると言われる現実存在の開始を指した言葉である。
15. 神における存在・本質・力能の一致、また直接無限様態としての運動と静止を産出の力能と神の活動、という観点において捉える図式の詳細については、拙論「神の存在・本質・力能 —— スピノザ『エチカ』におけるその同一性と原因の一義性 —— 」を参照されたい。そこで筆者は『神、人間および人間の幸福に関する短論文』においてスピノザが述べた流出因と活動因の統合が『エチカ』において果たす役割を明らかにし、またこの活動因という観点からスピノザの様態論を捉える解釈を提示している。

【参考文献】

- B. d. Spinoza, *ETHICA ORDINE GEOMETRICO DEMONSTRATA*, 1677.
 - , *KORTE VERHANDELING VAN GOD, DE MENSCH EN DESZELFS WELSTAND*
 - , *RENATI DES CARTES PRINCIPUORUM PHILOSOPHIAE PARS I. ET 2. COGITATA METAPHYSICA*, 1663.
 - , *EPISTOLAE*.

* スピノザの著作についてはゲブハルト版を使用し、加えて以下の URL で公開されているテキストを参照した。 C.Gebhardt (ed), *SPINOZA OPERA*, Carl Winter, Heidelberg, 1925 (<http://bspinoza.co.cc/>)

- J. Bennett, *A Study of Spinoza's Ethics*, Hackett Publishing Company, 1984.
 - , “Spinoza’s Monism: A Reply to Curley”, in Yirmiyahu Yovel (ed.), *God and nature: Spinoza’s metaphysics*, E. J. Brill, 1991.
 - , “Spinoza’s metaphysics”, in Don Garrett (ed.), *The Cambridge*

- Companion to Spinoza*, Cambridge University Press, 1996.
- , *Learning from six philosophers. Descartes, Spinoza, Leibniz, Locke, Berkeley, Hume. Volume 1*. Oxford: Clarendon Press, 2001.
- J.Carriero, “On the Relationship between Mode and Substance in Spinoza’s Metaphysics”, in *Journal of the History of Philosophy* 33, 1995.
 - , “Monism in Spinoza”, in Olli Koistinen and John Biro (eds.), *Spinoza: Metaphysical Themes*, New York: Oxford University Press, 2002.
 - E.Curley, *Behind the Geometrical Method*, Princeton University Press, 1984.
邦訳：『スピノザ『エチカ』を読む』, 文化書房博文社, 1993年.
 - , “On Bennett’s Interpretation of Spinoza’s Monism”, in Yirmiyahu Yovel (ed.), *God and nature: Spinoza’s metaphysics*, E. J. Brill, 1991.
 - G.Deleuze, *SPINOZA ET LE PROBLEME DE L’EXPRESSION*, Les Edition de Minuit, Paris, 1968.
邦訳：『スピノザと表現の問題』, 工藤 喜作／小柴 康子／小谷 晴勇 訳, 法政大学出版局, 1991年.
 - , *SPINOZA: Philosophie pratique*, Les Edition de Minuit, Paris, 1981.
邦訳：『スピノザ——実践の哲学』, 鈴木 雅大訳, 平凡社, 2002年.
 - M.Della Rocca, “Rationalism run amock: representation and the reality of emotions in Spinoza”, *Interpreting Spinoza*, Cambridge University Press, 2008.
 - R.Descartes, *Principia Philosophiae*, 1644.
邦訳：『哲学原理』, 山田 弘明／吉田 健太郎／久保田 進一／岩佐 宣明 訳註, 筑摩書房, 2009年.
 - D.Garber, “Descartes and Spinoza on persistence and conatus”, in *Studia Spinozana: An International and Interdisciplinary Series* 10, 1994.
 - D.Garrett, “Spinoza’s Theory of Metaphysical Individuation”, in Jorge Gracia & Kenneth Barber (eds.), *Individuation in Early Modern Philosophy*, State University of New York Press, 1994.
 - , “Spinoza’s Conatus Argument”, in Olli Koistinen & John Biro (eds.), *Spinoza Metaphysical Themes*, Oxford university press, 2002.
 - , “Spinoza on the Essence of the Body and the part of the Mind That is

- eternal”, in Olli Koistinen (ed.), *The Cambridge Companion to Spinoza’s Ethics*, Cambridge University Press, 2009.
- M.Gueroult, *Spinoza.1 Dieu (Ethique)*, Aublir, 1968.
 - G.W.Leibniz, *Die philosophischen Schriften* (7 vols.), ed. C.I.Gerhardt, Weidmannsche Buchhandlung, 1875-90.
 ———, *Leibniz: Philosophical Essays*, ed. and trans. R.Ariew and D.Garber, Hackett, 1989.
 - S.Nadler, ““Whatever is, is in God” :substance and the things in Spinoza’s metaphysics”, in Charlie Huenemann (ed.), *Interpreting Spinoza*, Cambridge University Press, 2008.
 - Y.Y.,Melamed, “Spinoza’s Metaphysics of Substance: The Substance-Mode Relation as a Relation of Inherence and Predication”, in *Philosophy and Phenomenological Research* 78 (1), 2009.
 ———, “Spinoza’s Deification of Existence”, in *Oxford Studies of Early Modern Philosophy* 6, 2012.
 ———, “The Building Blocks of Spinoza’s Metaphysics: Substance, Attributes and Modes”, in Michael Della Rocca (ed.), *Oxford Handbook of Spinoza*. Oxford University Press (forthcoming).
 - J.Park, “La critique du *medium* dans les *Cogitata Metaphysica* et l’invention d’une onto-épistémologie spinozienne dans le débat néerlandais (Burgersdijk, Clauberg et Heereboord)”, in Frédéric Manzini (dir.), *Spinoza et ses scolastiques*, Pups, 2011.
 - M. Savini, “L’horizon problématique du concept d’*ens reale* dans les Pensées métaphysiques de Spinoza”, in Frédéric Manzini (dir.), *Spinoza et ses scolastiques*, Pups, 2011.
 - V.Viljanen, “Field Metaphysic, power, and Individuation in Spinoza”, in *Canadian Journal of Philosophy Volume 37, Number 3*, 2007.
 ———, “Spinoza’s Ontology”, in Olli Koistinen (ed.), *The Cambridge Companion to Spinoza’s Ethics*, Cambridge University Press, 2009.
 ———, *Spinoza’s Geometory of Power*, Cambridge University Press, 2011.

- ・ 的場(藤井)千佳世,「スピノザのコナトゥス概念の思想的発展とデカルトの慣性の法則の諸困難」,『フランス哲学・思想研究』14号,日仏哲学会,2009年,所収,105-114頁.
- ・ 藤野 幸彦,「神の存在・本質・力能 —— スピノザ『エチカ』におけるその同一性と原因の一義性 ——」,『待兼山論叢』47号・哲学篇,大阪大学文学会,2013年,所収,35-49頁.